

備陽史探訪

追悼66号
発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL(0849)53-6157

立石さんを偲ぶ

会長 田口 義之

あれは確か昭和五八年の秋だったと思うが、立石さんから葉書が来た。「一度遊びに来なさい」という文面だった。それまで立石さんと面識がなかった私は、行こうか、行くまいか随分迷ったが、晩秋のある日、当時三吉町にあった立石事務所をたずねてみた。

立石さんと言うと、元福山市長で衆議院選挙に立候補されたりして、どんな人かなと思って訪ねてみると意外にと言うか、知らなかったと言いか、大変歴史好きな人で、話が弾んで初対面の私と二時間計り郷土史の話をしたように記憶する。まだ当時は大病を患われる前で、引き締まった風貌には精悍さが漲っていた。以来、昨年一〇月再び病で倒れるまで、常に身近にあってその人柄に接する事が出来た。特に昭和五九年脳梗塞で倒れられてからは、ご

著書の史料調査などで、ご不自由な右手代わりとして同行させて頂き、その高潔な人格に触れることが出来たように思う。

ここで立石さんのお人柄云々、と言うような不遜なことを述べようとは毛頭思っていない。ただ一〇年間の触れ合いの中で思い出に残ることをご披露して先生を偲ぶよすがとしたい。

立石さんのお話しの中で、一番頭に残っているのは、人との接し方である。

「つかず離れず」が良い。田口君、人生は長い。余りくつき過ぎるといつかお互い気まずい思いをすることが来る、つまらん事で大事な友を失うのは馬鹿らしいじゃないか。

また、「人からあれこれ言ってもらえるのは有り難いと思えよ。俺ぐらいになるともう誰も何も言ってくん」というお言葉も耳に残っている。だからと言うわけではないだろうが、私には口うるさいほどのご助言を頂いたように思う。「礼状はすぐ出す

ように」礼は電話でするな、簡単で良いから葉書でしろ。」

と言うわけで、この一〇年間を振り返って見ると、始めは気安く訪ねていた立石事務所も、次第に緊張して踏み入れるようになったことを告白しない訳には行かない。特にワシントンホテルに事務所を移されてからは、立石さんも再び気力を取り戻されたのであろうか、息つく間もない程のご著作で、先生の研究を手伝

いながら「もうこんなところに来るのはやめてやろうか」と思うこともしばしばであった。

立石さんと備探の会のかかわりは、昭和六二年にさかのぼる。この年二月六日、城郭研究部会の主催で「藤井皓玄と神辺合戦」と題して、岡山県の井原・芳井周辺の史跡を案内してもらったのがその初めである。丁度このころ、立石さんは「神辺城と藤井皓玄」と言うご著作の出版準備



在りし日の立石さん
平成5年度忘年会にて(於ワシントンホテル)

備中で、出版より先に会場でその研究成果をご披露頂いたわけだ。以来、バス例会は翌昭和六三年十月三〇日の「備前宇喜多氏を訪ねて」、昨年六月の「水無月の津山を味わう旅」で講師を務めて頂き、講演会も昨年三月五日には新装なった義倉の会議室で「お汁粉」に舌鼓を打ちながら「義倉創立の志」と題してお話し頂いたのは記憶に新しいところである。

また、立石さんの思い出で忘れてはならないのは、平成元年九月の一泊旅行「山陰杉原盛重紀行」である。先生は同年「神辺城と藤井皓玄」の姉妹編として皓玄のライバルであった杉原盛重の伝記を著述されており、その成果を会員に、ということ講師をお願いしたのであった。

この一泊旅行は私にとっても忘れ難い思い出である。実を言うとこの出版に当たっては、私は当初より調査その他で先生のお供をしており、旅行の下見を入れると三度同じ場所を訪ねたことになる。また、この旅行が武島さんとの最後の旅行となつたことも忘れ難い思い出である。

あの暑い初秋の一日、立石さんと武島さんと三人で、米子城跡の本丸を汗を拭きながら散策した。思えば、武島さんはこのとき既に病が昂じて相当苦しい旅であった筈だ。立石さ

んも同様である。不自由な右足をひこずりながらの登山であった。ご両人は不思議と気が合い、武島さんの墓参りをしたいというのが立石さんの口癖であったのだが……

立石さんの我々を想う気持ちは格別のものであったように思う。昨年十月病で倒れた後、数日して病院に呼ばれた。「なにごとだろうか、もしや……」と思つて大急ぎで訪ねて見ると、「広島文化賞の祝賀会はどうだったか」と不自由なお口で言われた。私が状況をご説明申し上げると、「うんうん」と頷かれて、「是非来てくださいよ」と言うのと、振り絞るような口調で、「おおくけえのう。いくど……」と言われた。これが私と先生との永遠のお別れになるうとは……。思えば先生との約束でまだ果たしていないことが多い。美作の矢筈城跡の探訪もそうだし、実は今年三月の白旗城の例会も最初の予定では先生にご案内頂くことになつていたのである。

先生の余りに早いご逝去は、会と私に大きな宿題を残されたと言える。今となつては取り返しのつかないことが多いが、その付託にお応えすることこそ残された者の務めであると思つている。(平成七年七月二一日、立石さんの遺影を拝しつつ、合掌)

ひとばた 人肌の連木

副会長 中村 勳史

六月八日早朝、田口会長からの電話で立石先生の訃報を知る。先月当会の創立一五周年には、祝賀金と激励のメッセージを頂いたのに……。天命とはいえこの世の無常を嘆く。

翌々日、浄土宗大念寺での密葬に田口会長と参列して、故人を偲ぶ。

先生は当会の実質的な顧問であり、講師としても山陰・県北への一泊旅行、岡山方面へのバス例会、郷土史講座の講師等々、親身になつてお世話頂いた。時には忘年会や、養老の滝での反省会にも同席され、私達酔人の放談に眼を細め、楽しそうに耳をかたむけておられた。

私は同じ作州出身のよしみで、先生の最後の著書となつた『美作大庄屋・大年寄記』を寄贈頂くなど、何かと大変お世話になつた。

先生との最後のバス例会となつた昨年六月、津山方面の史跡めぐりの想い出を二、三記して、ありし日の先生を偲びたいと思う。

福山を早朝に出て、今日はお互いに里帰りですなど談笑しながら二時間余、まず児島高德ゆかりの作業神社へ、次いで文化財立石家へ。ここ

は先生の母方出所で、一際説明に熱が入り、特産の納豆を斡旋して頂く。◎弁当風呂敷。衆楽園で車座になつて昼食。先生の弁当は風呂敷包み、私が「解きましよう」と手を出すと、「いや、自分でできる」と片手と口先で器用に解かれた。五体満足な身でありながら、立っている者は親でも使えと、とかく他力本願で生きて来た自分が反省させられる。

午後は津山城跡を見学して、法然上人ゆかりの誕生寺に行く。

◎法然上人産湯の井戸。緑の木立に囲われたこの井戸水は、中風によく効くとのこと。説明終わって「私も早くこの水を飲めばよかった」と、先生のつぶやきが今も耳に残る。

◎人肌の連木。法然上人が幼少時、菩提寺から母に送つた鍾乳石状の銀杏の乳木がある。この連木は、年中変わらず人肌の温さであるとのこと。

私達の会も、人との出会いを大切に、何時も温かみある会にしたいと思う。法然と立石家の先祖は同根とか、温く見守っていて下さい。

心残りなのは、かねての約束であった矢筈城にお伴出来なかつたことである。何時の日か有志で城跡に立ち、先生を偲びながら一献酌み交わし御冥福をお祈りしたいと思う。

合掌

立石先生を憶う

廣川 茂夫

昭和三十八年、広島県議会議員に初当選され、爾来二期七年間に亘り御活躍の後、昭和四十五年四月「一人竿頭に駒進めん」と決然と市長戦に立候補、四十二歳の若さで第八代福山市長として颯爽と登場された立石先生。

當時を回顧すれば、周囲の状況は仲々の難関が予想されたのに、能く突破されたものだと思外の外はない。市長の椅子は云うまでもなく、市政の要であり、当時、市議会の勢力分野は四十四人中与党僅か七名という少数であり、その点だけでも御苦労の程を窺い知ることが出来る。

その頃、私は衛生部長の職に在ったが、或る日要件を終えて市長室を辞そうとした際、突然「公害問題はどのように取り組んでいるか。基本的な姿勢はどうか」と質問され、即座の返答に戸惑ったが、「まず、調査、分析、防除、撤去の基本姿勢に立っている」と答えた。このことが、後日、市長と膝を交えるきっかけとなり、忘れられない思い出となっている。

又、就任二ヶ月位の頃であったと

思うが、次のように述べ懐されたことがある。

「係長以上の名前は全部覚えたが、どうも名前と顔が一致しないので困っている」と。

私は返事に窮して「その内、自然に一致するようになりますよ」とだけお答えしたが、就任早々二百八十名に及ぶ人名を記憶されるとは、並々の人ではないと、感じ入ったものである。確かに先生の頭脳は人並ではなかった。従って幹部職員も、市長との対話をいい加減なことで済ますことは許されなかった。前回と今回の答弁や説明が多少でもずれていると、「何れが正当なのか、前回とは説明が違う」と直ちに指摘されるので、その記憶力の素晴らしさに、誰もが舌を巻いたものである。

役所用語にも厳しく「市長さん」と呼ぶことを禁じられ、「市長」と呼び捨てにするよう厳命された。

又、以前は登庁すると、先ず上履きに履きかえ、平気で庁内を歩いていたものだったが、之も禁止されたのである。従って自然に職員の状態、規律が厳しくなっていくことは云う迄もない。

行政施策について就任直後から指針策定を模索されていたが、間もなく、昭和四十六年から向う三ヶ年計

画を完成された。

メイン・テーマは「快適な活力溢れる市民の都市」即ち

「快適」

「活力あふれる」

躍進発展する青

年都市。

経済の発展、健康な市民を象徴。

「市民の都市」

市民の民意の反映。

行政に住民参加のまちづくり、を意味する。

このテーマは、基本的重点施策の

目標を詳細に方向付けされていて、

行政の指針を市民に明確に示したものと

して注目された。

次いで、第二次計画、昭和五十一年から六十年への十ヶ年総合計画で

は、「人間環境の創造」なる計画案

が議会の議決を得て公表され、実施に移されたものである。

その大要は、基本構想四章・基本

計画六章に亘っており、具体的に施策が明確化されている。

その巻頭文には、

「福山の歴史と伝統に始まり、第一次計画によって、飛躍的發展を遂げたが、その繁栄の中にあつて、環境問題、市民意識の稀薄化など、更新る新しい視点に立って、直面する課題を厳しく認識し、人間尊重を基調とした計画実現に市民と共に、行政の総力を結集して解決していきたい。

云々」と抱負を述べられている。

誠に格調の高い論文であると評価されたものである。この政治姿勢から生まれたものは、一学区一公民館、総ての児童を収容できる保育所の建設、蔵王保育所、西幼稚園、西小学校、城北中学校に難聴児の一貫教育施設、老人大学、市民図書館、市民病院、園芸センター、竹ヶ端運動公園、社会福祉会館、市立福山女子短期大学、東福山駅設置等々、多方面に亘る。市民のための施策が実現したのである。

市長の行動は、毎日が分刻みの日程であった。にも拘らず、市長室に置かれた大きな書棚には、日を追う毎に書籍が増え続け、終にはその横に堆く積み上げられていたことを思い出す。あの多忙な日常で、何時読書されているのか不思議でならなかった。確かに読書力の旺盛な人であった。

先生の人物像を紹介することにはならないが、嘗て警咳に接した者の一人として、回想の一端を述べさせて頂く機会を与えられ、感謝に堪えない。

在りし日の御尊顔を偲びつつ、謹んでご冥福をお祈りする次第である。

思い出すのは 笑顔です

佐藤 秀子

『関ヶ原 島津血戦記』田口会長が貸して下さった昭和五十九年の立石さんの著作です。

記述が詳しく、合戦を目のあたりに見ているようです。胸がふつつしてきます。血湧き肉踊るの意味が少しわかった様な気がしました。

島津義弘が甥の豊久と別れる場面では思わず泣いてしまいました。三十一才の豪磊な気質と純真な品性をもった副将は、東軍の中を突破して薩摩に帰る決心をした叔父に、

「公、急がれよ殿は豊久が仕る」と申し出るので、義弘は十五才の初陣から一緒だった豊久との別れに七十才近い身を震わせて、後姿で泣いて出発します。

口絵に載っている写真は胸に二ヶ所槍傷が残り、糸も切れている紺緞の鎧です。古びた藍色のぬけがらには、まさしく豊久の無念が暗く潜んでいる様にみえました。

島津藩は

「今日の戦は島津は島津。われらはわれらで、武名をかけ申す。勝敗は天の知るところ、おさらばでござる」

と言って三成の出陣の要請を断わります。豊久の夜襲動議が三成によって、にべもなく一蹴されたことや、西軍が墨股防衛陣を撤収した時、島津隊が前線に置き去りにされたこと

の他に、千人そこそこの寡勢だからと、その武略が天下に鳴りひびいて

いる島津義弘に対し充分な敬意を表しなかつたことが、この一途な武将の心を閉じさせてしまいました。

そうして、全力をあげて南新してゆきます。最初は関ヶ原から三キロの部落で井伊直政軍に、本田忠勝軍にと次々に追われ、ステガマリ戦法に出ます。

「これは薩摩特有の戦法で後尾の一组が本隊の脱出を助けて犠牲となる。騎卒は道路脇の茅草にひそみ、点々と銃を構えて折敷き、追撃して来る敵の先鋒に発砲する。銃を撃ち終えれば槍をとって突撃する。死ぬまで戦い続けることが定められている。

敵が立ち止まれば、本隊を追ってついてゆくが、まずは討死を覚悟してかかる。脱出のために当初から予定される捨て石である。このようなやり方を何度か繰り返すうちに、主将と本隊は敵の追撃から逃がれるのである」と書いてあります。この他にも島津軍の軍律は、とても厳しく、

今の世の人達のうち、何人が武士になれるでしょうか。

「戦では、いずれも決死の場所と定め鉄砲三発のうち必ず敵にあてること。しかし、鉄砲を陪卒に渡し、大刀を抜き手銃をとる者、敵一人をも殺し得ざる時は、戦終りたる後、誰にても切腹たるべし」

他に、「所属隊将の首級を敵に委すべからず、この仇を報じ得ざれば一隊悉く討死すべし」の軍訓もあり、これは後日、新選組の隊則にもなっているそうです。

三十余キロを七時間かかって駆けぬけ、食糧はなく、馬を殺して食し寸金装飾した刀の鞘を売り、餅屋の餅を盗み不眠不休で堺へ着き、関ヶ原から二〇〇キロの住吉に着いた時は八十名になっていました。

それにしても痛快というか、小気味よいというか、薩摩武士の気骨が伝わってくる物語でした。

後年、敵であった宇喜多秀家がかくまい助命を願ったが、かいたく八丈島へ遠流。やさしさも又、あり。宇喜多氏の著作出版の年、岡山へのバス例会の車中で、立石さんが歌って下さった、おふくの歌。何度もくり返しながら感きわまって流された涙、そして少し早口で情感こめて説明して下さった直家、秀家の話。

よく岡山城へ行く私は、りりしい秀

家の画像をみる度に三十八才で秀吉の側室となった、おふくの方の美しさが想われ、そして、あの大きい見事なお墓も思いたす。三度も夫を変えたけれど愛された女は幸せです。

どこに行くにも背広にネクタイ姿をくずされなかった立石さんを、山城に行つた時、娘や、やはり今は亡き高橋さんと手を引いてあげたり、後から押してあげたことも思い出です。少し前かがみの姿勢と、長い足、大きい靴。

山陰旅行の写真では、墓石に手をかけて笑っています。静かな声が聞こえてきそうです。

先日、妹と同じ年の親せきのお嫁さんを亡くし、沈んでおりましたが、きのう、四年前に友人にもらった一枝の月下美人に二ヶ蕾がついているのを見つけ、うわつと、ささやかな幸せに心が満たされました。

立石さんの残された著作は、本の魂となつて生き続け、多くの人を楽しませ……。そして、天国からのテレパシーを誰かが受信し、又、新しい歴史小説を発表してくれば良いと願っています。

年輩の方の多い私達の会、長寿を保つ会を第四の部会にしませんか。

立石さんの御冥福を心よりお祈りいたします。

合掌

福山中興の祖 立石氏に捧ぐ

柿本 光明

動乱を歎く生きたるものもののふの
操は純白き沢瀉の花

先年、福山の開祖水野勝成公の事蹟を著し、水野勝成公をお祭りする聡敏神社の大祭(昭和五十四年)にあなたはこの歌を献じた。これは自らの生きざまもかくありたいとの思いが込められていたものと思う。

六月の雨にうす紫の紫陽花の咲きはこるとき、あなたは六十八年の生涯を終えてしまった。

思えば故高橋偵一(代議士)先生のうしろを書類を包んだ紫の風呂敷をこわきにかかえて、スラリと背の高いロイドメガネの青年がついて来たのが、わたしとの初対面である。

高橋偵一先生が「これは、かけだしの立石君といって弁護士をやっとる」紹介されると「わたくしは立石定夫と申します」と語る言葉は、大変理知的でも静かであり、いろいろ話しているのと彼の胸中にもっている情熱と信念がひしひしと伝わってくるのが感ぜずにはおれなかった。

それから——昭和三十五年福山地区弁護士会々長。三十八年四月広島県会議員に初当選、二期半ばの四十

五年四月の福山市長選挙に、圧倒的不利な下馬評をくつがえして市長の座についた。わたくしがよく使う言葉に「賢人は歴史を学ぶ」がある。

まさに郷土福山の自然や人をこよなく愛し、その歴史に並々ならぬ研鑽を積まれ、初代福山藩主水野勝成公を自分自身の生き方の手本として尊



平成6年6月津山立石氏生家にて

敬し「元和の栄光—水野勝成の政治」など多くの歴史書を著するなど、歴史家としても高く評価されていた。

昨年の六月だったか、備陽史探訪の会のバス例会で作州地方を自ら講師として院庄の作楽神社・津山二宮の壮大な立石家の屋敷・津山城・誕生寺などを限りなく説明された姿が

昨日のように思えてならない。

市政・県政で成し遂げられた功績は「快適な活力あふれる市民の都市」を実現すべく都市像の指標としてその実行は数々の事業達成を見てもわかることである。

「賢人は歴史を学ぶ」即ち、福山開祖は水野勝成公であり、あの精神力自分のやるべきことに常に自信と誇りを持ち、立石流くを貫き、まさに激動の時代を力いっぱいかけぬけたあなたこそ福山中興の祖である。

時代の中に光り輝き、馬上を走る名将よりも茫茫とした草原に一人たたくむ古武士のように、より一層のロマンを晩年求め続けたあなたは、先年異郷に旅立たれた田田武雄先生の霊前に捧げられた献歌が胸に悲しくつんざく。

雄しきや 怒涛の如き 人の世を
ただひたすらに 駆けし君はも
義理に立ち 情ある人よといわれ

しか 巨星は落ちて 遂に還らず
人の世に生を受け、誰もがいつしか別れゆくことを常とはいえずとも忽然として不帰の客となられるとはそれは、三十五年間の短いお付き合いであり、余りにも若く誠に痛恨の極みであり哀惜の情に耐えぬ。

亡き人を ついの別れと弔えど
心は消えぬ 在りし面影

古墳講座Ⅱ

第四回古墳講座Ⅱは「古墳に納められたもの」と題して副葬品について学習します。前期古墳に納められたのは「銅鏡」等の呪術的なものであるのに対し、後期は「武器」が中心になります。この大変化が騎馬民族征服説の論拠となっていることは有名です。副葬品の意味するものは何か、その謎に挑戦します。

▲実 施 要 項▼

- 日程 九月二日(土)
- 時間 午後七時から
- 場所 中央公民館2F会議室
- 講師 山口哲晶古墳部会長
- 費用 資料代一〇〇円

『古事記』を読む

第一一回「『古事記』を読む」は、「黄泉の国」を中心に学習します。

▲実 施 要 項▼

- 日時 八月二六日(土)
- 時間 午後二時
- 場所 中央公民館第二会議室
- 講師 神谷和孝名誉会長
- 参加費 一〇〇円程度(資料代)

立石先生との出会いに 寄せて

彦坂 昭子

二度とない人生、人間として生を頂く中での立石先生と私。思えば不思議な縁でした。先生の尊い一生の路上にて、私のような愚女が先生と出会えた事は、私にとっては、機法一体の起となり、因となり誠に勿体ない事でした。

過日、先生の密葬時でのお別れ、信念を生涯貫き通された滅度の慈顔に接し、合掌させて頂いた折り、私の脳裏に先生とのさまざまな想い出が走馬燈のように駆け巡りました。

その昔、西ノ川老人集会所の落成式の時、先生は福山開祖水野勝成公を讃えられ、全身全霊をもって青年のように福山市政を論じられました。それは机上の空論ではなく、まさに命懸けの武将のお姿でした。

また、あの日あの時選挙の際、戦いが終わった後、大好物の幸水梨を水で冷やし差し出した私達後援会婦人部。一口一口おいしそうにお運びのお顔等々、目の前に浮かぶようです。日頃から黒田武士の心意気を好まれた名槍日本号の立方を望まれて一曲舞った私、お恥ずかしい限りでした。先生が政界を引かれてからは一時

途絶えていたご縁が備陽史探訪の会で再開し、史跡探訪の旅でお供させて頂くようになりました。

昨年「水無月の旅」では講師を務められ、立石家住宅を始めとする史跡で詳しく説明下さいました。

その際、法然上人誕生寺で、上人の白道の信心、十住毘婆沙論等、浄土宗についてのご住職の法話をうかがったあと、またいつか、と云いつつお別れしたのが昨日の事のようにです。

あの事この事と指折ると、想い出は数えきれず、胸が一杯になり、思わず知らず感涙を流してしまいました。

先生の「快適で活力溢れる都市づくり」「明るく住み良く、住んでよかった福山づくり」等の市長時代の多くの業績に対し、私達は二十一世紀に向けて前進し、お応えしなければと感無量でございます。

先生の語って下さった人生の指針訓は、多くを語らじと云えども、私達の心の奥底に生き続けています。

こうして想いを巡らすなか、窓越しに月が見えます。私は南空の丸いその姿を観て、先生の「真の月を観よ」「指差す指にこだわれば月を観ず」の言を思い浮かべました。さらに、「止水に写る月、月さわぐにあらず、面さわぐなり」等々、先生との片時の語らいのこまこまが浮

かびます。月と重なる仏陀の示された指、それは、月により観る事が出来る真理が照らされたもの。またしても昨年話しておられた、先生の龍樹(ナーガールジュナ)論が胸をよぎります。今一度、願わくば、この月指差す月を論じ、一献倒けたく悔やまれて止まぬ愚かしい私です。

電光朝露、避ける事出来ぬ一〇〇の死。先生の死を正面から見据えなければと決意しております。いまひたすら弥陀の誓願大悲に包まれ、先生の想い出は尽きません。

先生、多くの触れ合い有り難うございました。今一度、先生はまれなる偉大な方でした。

生前の触れ合い、本当に本当に有り難うございました。合掌。

掛迫六号墳 測量調査について

地権者の田口寿氏と草浦久人氏、草浦達人氏が測量調査を快諾下さり、プロジェクトがスタートしました。第一回に引き続き、第二回の学習会の日程が決まりました。

▲実施要項▼

日程 九月二四日(日)
時間 午前九時～十一時
場所 駅家町法成寺公民館
演題 「測量調査の意義と実際」
講師 篠原芳秀先生
(広島県埋蔵文化財センター係長)

▲下草刈り・木の伐採日程▼

- ① 一〇月二二日(日)
 - ② 一〇月二九日(日)
 - ③ 十一月五日(日)
 - ④ 十一月九日(日)
 - ⑤ 十一月二六日(日)
 - ⑥ 十二月一〇日(日)
- 以上すべて午前一〇時～午後四時
⑦ 十二月一七日(日)
午後一時～午後四時

▲測量日程▼

- ① 一月一四日(日)
 - ② 一月二一日(日)
 - ③ 一月二八日(日)
- 以上すべて午前一〇時～午後三時
二月～四月は未定です。

HOT HOT NEWS I 赤坂学区文化連盟主催 文化講演会開催

▲実施要項▼
日程 八月二〇日(日)
時間 午後一時三〇分～三時
場所 赤坂公民館二階会議室
演題 「乱世の群像」
講師 田口義之
(備陽史探訪の会長)

心に残る先生のお言葉

末森 清司

立石先生が天国へ旅立った事を知ったのは六月中旬岩下さんの便りです。以後心の中に穴があいた感じです。

「備陽史探訪の会」に入会してから先生と身近にお話が聞ける様になり、先生の担当される歴史講演・史跡探訪には心弾ませて参加させて頂きました。その都度、歴史の正しい見方、知識の深さ、歴史の中の人々、とりわけ戦国の世に亡び去った一族へはやさしく温い心をもつての接し方に対していつも感動しておりました。

杉原氏、宇喜多氏、福山城主水野氏の話は今も心に強く残っています。

先生は会の行事での私の担当する史跡探訪にも度々参加して下さいました。その中のひとつ、県北大朝町豊平町にまたがる吉川氏史跡探訪一泊旅行の折には、宇喜多秀家公の姉君で秀古公の養女として吉川家に嫁入れた元長夫人の屋敷跡や墓所では先生の研究テーマ宇喜多一族の一人である夫人について解説をして下さり話の担当に花をそえて下さいました。実に楽しい二日間を参加した方々と味わった事を昨日の様に思い出しております。

私の郷里三原にある「小早川氏居城跡沼田高山城」についての研究を平成五年九月、十月と二回に分けて三原図書館・定例行事・郷土文化研究会で発表しました時はお多忙の中田口会長と参加下さり最後まで話を聞いて下さいました。

立石先生がわざわざ福山から参加下さったという事を知った会場の方々と三原図書館々長、担当課長がびつくりされておられました。私も先生が参加して下さいた事に勇気付けられ初めての事とはいえ力を入れた発表をする事が出来ました。

終わった後先生は「自分の足で何回も何回も歩き廻り細やかに調べているだけに迫力がありました。歴史や史跡は自分の足で現場を何回も歩いて見ないと本当の事は解らぬものです。そこから当時の人々の行動、話し、心をいかにくみとるかという事です。それにしてもよく調べましたね」と感想をのべて下さった事が大変うれしく以後の研究にどれだけ役立っている事か……。

現在生活と仕事の関係で近江国(滋賀県)に移住してありますが休日は待ってましたとばかり史跡探訪、主に中世戦国の山城ですが単独行します。今日も小谷城へ登って来ました。亡び去った浅井一族を想いつつ

先生の言葉が強くうかんで来ます。史跡や歴史だけでなく仕事関係に於いても先生の教えは色々と私を勇気づけて下さいます。先生は私の心の中にずっと生きつづけておられるのでは……さびしい事ですが今では感謝の気持ちがいっぱいです。先生安らかに……

合掌

☆備陽史ブックレビュー☆

学生時代、知人に活字中毒といってもいいやつがいた。いついかなるときでも本を携帯し、友人同志の会話の途中でも、話題が自分の興味の対象から外れると持参した本にすぐ目をやる、そんなやつだった。その時の読む本の多くは小説、なかでも当時はやり始めた冒険小説や推理・SFが中心だった。

しかし、いかに本が好きでも、地方から上京した学生は一樣に金がない。だからそいつもハードカバーは図書館から借り、自分で金を出して買うのは文庫本ばかりであった。

いまでこそ大出版社も文庫で冒険小説・SFをたくさん出しているが、当時は「ハヤカワ文庫」と「創元推理文庫」、それに現在古本屋で異常な高値をつけている廃刊した「サンリオ文庫」くらいだった。

この男が文庫を購入する際、判断

基準にしていたのは一ページあたりの値段であった。彼の口癖は「サンリオは一ページ平均〇円だから高い俺は買わない」であった。そのくせ「毎日日本屋に通って立ち読みで済ます」と平然といていた。書店にしてみれば、こんなやつに巣くわれてはたまったものではなかったろう。

正直にいうと、評者はこの男をバカにしていた。本の購入判断は内容ですべきで、一ページいくらではない——そう信じていたからである。

ところが、年のせいだろうか、最近になって彼の気持ちが分かるようになってきた。二千元を越える本になると「えーと、一ページはいくらになるのかな？」と、ほとんど無意識に計算しているのである。会員の皆さんは本の購入にいかほどまでお金をかけられるのだろうか？

評者の場合、興味を持った本(調査報告書等は別)を購入する場合の判断はおおよそ次の通りである。

●千円未満 無条件で買う。

最近、この価格帯で買えるのは、まず新書や文庫だけである。

●千円代 ほとんど買う。

小説なら厳しく検討するが、歴史書なら安い。新潮選書・角川選書・朝日選書・講談社メチエ等は買いつつ

●二千円代 あれこれ迷う。

二千円そこそこなら買うだろうが、三千円近くなると、相当考える。

好きなテーマ、好きな著者が重ならないと思切れない。だけど、歴史関係のハードカバーはこの価格帯が多いんだなあ、これが。

●三千円代 うーん？うーん！

その場で買うのはこのへんまで。

●四千元代 崖っぷちに立つ気分。

不思議とこの価格帯が少ない。

●五千元以上 年に一度のお祭だ！

いわゆる高額図書の部類に入ってくる。え？高額は一万円以上ですって！あたしゃ、古本屋に出てる五千円の『日本城郭大系』をこの二年間買えないでいます。ハイ。

①発掘された日本列島

95新発見考古速報 文化庁編

朝日新聞社 一五〇〇円

B4版でカラーページが豊富。やはりこういうものを作らせたら新聞社が一番。何より安いのがいい。

古代では「三内丸山遺跡」「原の辻遺跡」「西求塚古墳」、中世では「柳之御所遺跡」「今小路西遺跡」

など、注目すべき遺跡はすべて網羅。なお「95新発見考古速報展」は、福

山に最も近い場所では兵庫県立歴史博物館(姫路市)で開催される。

②難波京の風景

文英堂 一九五〇円

「古代三都を歩く」シリーズの一つ。

平城京・平安京はいつも日の当たる場所にいるが、難波京の注目度はいま一つ。天下の台所、大阪へとつながる流れは古代からあった。考古学の成果を満載して二五五頁はグー！

③福岡県の城

廣崎篤夫著 海鳥社 三二〇〇円

「山城探訪」は「そごうブックセンター」でベストテン入りするほど好調な売れ行きを示し、増刷が決定。

潜在的な山城ファンが思いのほか多かったのである。四月に出たこの本も福岡の山城ファンの情熱の結晶。

腰巻の案内文には「福岡県各地に残る古代・中世の城址を、四〇年に及ぶ文献渉猟と現地踏査をもとに紹介する。三一〇カ所を解説、縄張図一三〇点・写真二二〇を掲載」とある。堂々の五六〇ページだが、残念ながら福岡周辺の書店には置いてない。山城ファンは取り寄せること。

④復刻版 太平洋戦争(上・下)

中野五郎、R・シャーウッド編

光文社 各一〇〇〇円

三十年以上前、どういふ事情かわからないが、評者の家で写真会が開かれたことがあった。米軍が撮影した太平洋戦争の記録映画だった。確

か夜八時ころだったと思う。幼かった評者は、母の膝の上で飛行機と砲弾が飛び交うのをひたすら見ていたが、そのうち眠くなり、いつの間にか寝てしまった。

敗戦からわずか十数年で負けた戦争の映画を見る！大人たちはいったいどんな思いで見ているのだろう。

後に、その記録映画がこの本の元

のひとつになっていてる事を知った。戦後五〇年、数多くの記念出版が続いているが、あえてこの本を選んだ。

⑤古代日本のミルクロード

廣野卓著 中公新書 七二〇円

新書の中では、中公新書が最も多くの一般向けの歴史書を出している。今はフリーとなった、時刻表マニアの宮脇俊三氏がこの編集方針を確立したのでという。彼自身も講談社から「古代史紀行」(文庫もある)や「平安鎌倉史紀行」を出している。

さて、この本の副題は「聖徳太子はチーズを食べたか」。乳製品の渡来と貴族の食生活での位置付けを中心に考察されている。

醍醐(古代のバター、美味を表す醍醐味はここから出た)は天皇の諡号にもなったほどだが、その後乳製品は廃れてしまうのは歴史の謎。その原因のひとつは武士の台頭にある、としているのには評者も驚いた。

⑥家紋逸話事典

立風書房 二〇〇〇円

よくある家紋事典は、ひたすら家紋を並べただけの単純な体裁のもの(「最上家紋宝鑑」等)が多いが、これは「逸話」事典である。代表的な七〇〇の家紋と、それに付随するエピソードを収めた手頃な読み物になっている。評者は、石田三成の家紋が「大一大万大吉紋」という一風変わった紋であることをこの本で初めて知った。著者の丹羽氏は「地名」「姓氏」「家紋」研究の大家である。

第八回郷土史講座 福山の神社信仰

備後には、式内社十七社を始めとして著名な神社が数多くあります。今回の講座では、これら式内社を中心として、福山八幡社、草戸稻荷など福山周辺の代表的な神社を取り上げ、その信仰の歴史・在り方について神谷名誉会長にお話いただきます。

▲実施要項▼

日時 九月三〇日(土)
時間 午後二時
場所 中央公民館第二会議室
講師 神谷和孝名誉会長
参加費 一〇〇円程度(資料代)

六月例会を終えて

種本 実

六月といえば梅雨の季節、お天とうさんが心配だったが、「古代吉備不思議旅」は恵まれた空のもとでは予定通り行われた。

道路事情のため、先年の「鬼ノ城」以来バス二台をチャーターしたこと、それに伴う収支、すなわち参加者の見直しなど、数か月前から事務局は準備に追われていたようだ。

いつものことだが、家事に、仕事に追われる中を会務に忙殺される役員の皆様のご苦労には頭が下がり通しである。

最初に訪れた福生寺は他に訪れる人もなく、森の中に突然現れた二台のバスに、古刹を取り巻く静寂な空気が一時の振幅に襲われたようだった。国の重文である三重塔は足利義教の再建とのことで、田口会長より嘉吉の乱について一席聞く。境内の自然を利用した庭園は、滝を滑る清水が溪流に落ちるさまが見ていて飽きなかった。お寺の名物のアジサイも場所によっては大きな花をつけていたが、梅雨空を控えて今少し早いようだった。

いよいよ、本日のメイン熊山遺跡

へ向かう。下見の時には工事中だったが、やっと頂上まで舗装された路をバスは頭を樹木に打たれながら登る。熊山神社では、児島高德の伝承「腰掛け石」「旗立石」を目にした

り、本殿に首をたれ、拍手を打つ人も見られた。周囲の低い土塀などから元の館の姿に想いを馳せる。

熊山遺跡に行く途中は「千年杉」と呼ばれる樹齢七百年の杉など、高い木立に覆われている。と、目の前に突然四段四方の石積みが見れる。

「へー、ナンジャコレハ?……」
 古代不思議旅と名付けた所以である。下見の際、幸運にも熊山役場の産業課長さんに出会えたので、三月に発刊したばかりという、町史を買った説を皆さんに語っていたところへ地元の方が飛び入りでガイド。付焼刃の話とは違った趣きがあった。難かった。児島高德の伝承「腰掛け石」「旗立石」などは熊山遺跡の傍にあったものとのこと。石積み遺構も昔はまだまだ見られたようだが、原形を留めているのは目の物しかないようだ。周囲を観察すると、三段に積まれた事がわかる。

北側には、廃仏毀釈が行われた明治まで山中にあった霊山寺の歴代住職の墓と見られる塔が残っていた。

霊山寺も福生寺も鑑真の開祖と伝わる。が、目が不自由だった彼が、太宰府から奈良の都へ向かうのでさえ大変な道中であつたらうに、と想うにつけ開祖の実際はどうだったのだろうかとの思いも湧いてくる。

昼食をとった休養所は木の香も新しい施設だった。この傍に県下最古の銘入り宝篋印塔が残る。平田さんから説明を受け、石像物の入門書の紹介もしていただく。例会の都度、宝篋印塔など石像物に触れることが多いので、見方を学んでみたいものだ。

閑谷学校は広場の芝生の緑が眩しかった。学校のガイドさんはさすがによどみなく説明される。建物の屋根は備前焼の瓦、その下には、漆塗りの流し板が施してあり万一の雨漏りにも備えてある。

学校の石塀も国指定重文である。水成岩を切った、蒲鉾形のきれいな表面には草一本も見られない。大正十四年、中国から渡った「楷の木」が二本聖廟の前に緑の葉を繁らせていた。秋には、紅と黄に色付くとのこと。その季節にまた見たいものがある。

和気神社を下見で訪れたときには、ちようど藤祭で全国各地の藤を集めたという藤公園には、近郊からの人出で溢れていた。清麻呂公銅像の前

で、「この顔は誰をモデルにしたのだろう」と、想像をたくましくした会話がなされていた。明治の拾円紙幣の顔だが、実物ははたしてどんな顔だったか。

万富東大寺瓦窯跡は時間の都合で寄らなかつた。源平の争乱で焼けた東大寺の再建に、俊乗坊重源は後白河法王の知行国、備前の国を開墾しその財源に当てた。窯跡は今では看板が立っているだけで、面影はない。

牟佐大塚は全長十八メートルの石室を持つ。コウモリ塚(十九・七M)や箭田大塚(十八・五M)など岡山県の大規模穴式石室のなかでも肩を並べる遺跡だ。石室のなかはじつとりと湿っていた。はるばると井原から運ばれてきた貝殻石灰岩で造られた家形石棺はただ沈黙をまもり、私達はおもいおもいに石棺にさわって古代の息吹を感じ取ろうとしたのだ。

この遺跡を見学するにあたっては、バスの駐車場を提供して下さい、地元の方のご好意があったからであることを記しておこう。

両宮山古墳も車窓からの遠景を眺めるにとどめた。例会に備えて、勉強したつもりだったが自信をもって話せるには程遠かった。次回とは……

おまつのみこ 大津皇子はなぜ死んだ

門田 幸男

『万葉集』は日本最古の歌集であり、薫り高い文学の結晶であることは疑いがない。しかし同時に『万葉集』は、時代の相を鋭敏に反映した「政治の書」としても読むことができる。本稿では、持統女帝から死を賜った悲劇の青年皇族、大津皇子に焦点をあて、『万葉集』で彼がどのような描かれているか考えてみたい。

大津皇子、窈かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、大伯皇女の作らす歌二首

我が背子を 大和へ遣ると さ夜ふけて 暁露に 我が立ちぬれし

あの人を 大和に帰し見送ろうとして 夜も更けて 暁の露に わたしは立ち濡れたことよ

二人行けど 行き過ぎ難き 秋山をいかにか君が ひとり越ゆらむ

二人で行っても 行き過ぎにくい 秋山を どんなにしておの人はひとり越えていることやら

大御皇女と大津皇子の父は天武、二人は母(太田皇女)を同じゅうする姉弟である。

一般に「背子」は「夫」あるいは「恋人」を表すが、(一〇五)の場合、明らかにいる弟(同母弟)大津皇子を指している。すなわち歌の本意は、いる姉(同母姉)がいる弟のゆく末を案じたものと断じてよい。

ここで、この歌に付いている「大津皇子がひそかに伊勢神宮に下り、帰って来る時に、大伯皇女が作られた歌二首」という但書きについて若干説明を加えておきたい。

大伯皇女は伊勢にいた。何故か。それは彼女が斎王(いつきのひめみこ)だったからである。

『延喜式』によると、制度確立期の斎王は、未婚の皇女(内親王)から卜占して選ばれ、常に伊勢にあって天皇の代わりに天照大神に仕える役目を担っていた。ただ、考慮しなればならないのは、大伯が史上初の斎王だということである。卜占よりむしろ天武の意思によるところが大きかったのではなからうか。

しかしいずれにせよ、斎王は天照大神に仕える身である。大伯は潔斎の日々を送っており、原則として斎宮(斎王の住居)から外へ出ることはなかったし、外部の人間とも会わ

なかつた。そうした斎王の任を知った上で、あえて大津は「窈かに」会いに行く。つまり、そうせざるをえないような切迫した状況があり、心理的によほど追い込まれていたに違いない。

では、その状況とは何か。第一に、後ろ盾であった父天武が薨じたことである。

『日本書紀』によれば、天武はその八年(六七九)、吉野に六人の皇子を集め、たがいに協力し合うことを誓わせる。その際、草壁は六人を代表して「若し今より以後、此の盟ひの如くあらずは、身命亡び、子孫絶えむ。忘れじ、失たじ」とこたえている。この時天武が作ったのが、あまりにも有名な次の歌である。

よき人の よしとよく見て よしと言ひし 吉野よく見よ よき人よく見 (巻一、二七)

昔の良き人が よい所だとよく見て よいと言った この吉野をよく見よ 今の良き人よよく見るがよい

だが、こうした誓約をわざわざ草壁や大津にさせなければならなかったこと自体、天武が己の死後に不安を抱いていたからに相違なく、皇子たちも、いずれ皇位をめぐる争

いが起こることを予期していたのではなからうか。つまり、大津の伊勢への密行は、そうした暗い予感に裏打ちされたものなのである。

第二に、生母太田皇女も既にこの世の人ではなかったことである。

大津にとって大伯は唯一の「はらから」であった。心から頼れるのは彼女しかいなかったのである。

翻って、持統は大津の行動をどう見たであろうか。おそらく不穏な動きとして感知したと思われる。天武の死に際し、政務を放棄してまで斎王に会いに行くこの行為は持統の神経を逆撫でしたに違いない。確かに大津は軽率であった。持統が謀反を恐れたとしても不思議はない。

実は『万葉集』はこの二首のあと、大津皇子と石川郎女の相聞(恋愛歌)を載せている。さらに続けて草壁皇子と石川娘女の相聞も……。

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの 山のしづくに 妹待つと 我立ち濡れぬ 山のしづくに (巻二、一〇七)

(あしひきの) 山のしづくで 貴女を待つて わたしは立ち濡れてしまったよ 山のしづくで 石川郎女が和へ奉る歌一首

我を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山のしづくに ならましものを

(巻二、一〇八)

わたしを待って あなたが濡れたとおっしゃる (あしひきの) 山のしづくに なれたらよかつたのに

大津皇子、窈かに石川女郎に婚ふ時に、津守連通がその事を占へ露はすに、皇子の作らず歌一首 未詳

大津皇子がひそかに石川郎女と關係を結んだ時に、津守連通がそのことを占ひ願したので、皇子が作られた歌一首 実否のほどは分からない

大船の 津守が占に 告らむとは まさしに知りて 我が二人寝し

(巻二、一〇九)

(大船の) 津守ふぜいの占いに 出るだろうとは 百も承知で われわれは二人で寝たのさ

日並皇子尊(草壁皇子)、石川女郎に贈り賜ふ御歌一首 女郎、字を大名児といふ

大名児を 彼方野辺に刈る草の 東の間も 我忘れめや

(巻二、一一〇)

大名児を 向こうの野辺で 刈っている萱のように 東の間ほどに短い時間 私は忘れるものか

(一〇九)で大津は、草壁の恋人石川郎女との性愛をあからさまに歌い、事が露見しても悪びれた風がない。むしろ草壁に比べて俺の方が魅力があるから彼女が靡いたのだ、とでも言いたげである。したがって、一連の歌は大津皇子の絶頂期、天武二二年(六八三)から同一四年までの間に歌われたものと思われる。

『日本書紀』によれば、天武二二年の条に「二月の己未の朔に、大津皇子、始めて朝政を聴しめす」とある。皇太子であった草壁と同じ土俵に上がることができたのである。時に二十一歳、才長けた大津としては、あらゆる面で草壁に負け

たくなかったはずである。しかし一方、この作歌が事実ならば、持統、草壁ともに大津の態度に傲岸不遜と脅威を感じたに相違なく、その思いが「大津死すべし」と発展していったのではないだろうか。

こうして『万葉集』は、大津賜死の理由を暗示し、斎王の任を解かれた大伯の絶唱を今に伝えたのである。

うつそみの 人なる我や 明日よりは 二上山を 弟と我が見ん

(巻二、一六五)

なお、本文中の歌の原文・訳文は小学館版『万葉集』①によった。

森の中に佇む勝山、期待に弾んでタラップを踏む。空は青く雲が去来している。

井原に入ると、子守唄の里と標織が立ち、豊かな夢をふくらませてくれる。井原は源平合戦後、那須の与一の領地だった由。

足利尊氏が九州に下向の際、その母を出生地である井原に留めたという事跡も、今初めて聞いた古事であった。荏原郷は、北条早雲の出身地と聞いた時は、唯驚くばかり、成羽町は福山市の始祖水野勝成公夫人の出身地である。

上房郡北房町は、はたるの里、夜を迎えた清流の草蔭に点滅する神妙な光。幼い頃の思い出と重なる。

延文年間築城といわれる勝山の高田城、関東から地頭として赴任した三浦氏の居城である。それから明和元年まで約四百年間、興亡幾多の戦役の末、同祖系系の三浦明次が三河の地から入部し、明治維新まで続いた。

勝山の懐に抱かれて

岡本 貞子

も残り、優美な姿で昔を偲ばせてくれる。海運の便は勝山地方に多大な経済の繁栄をもたらしたことでありう。

落ち着いた町の雰囲気、道幅が狭いのは戦前の福山を思い出させる。盆地の利による醸造の発達、御前酒や味噌造りが昔ながらの家屋で生産されている。

最後の毎来寺、版画一ぱいのユニークなお寺。天井から襖、調度に至るまでの版画がこんなに美しく調和するものとは、初めて知る幸せであった。

勝山にたたずむ幸せを回想しつつ。

『備後古城記』を読む

前回は参加者二三名を数え、意気揚がる「中世を読む会」。「古事記」を読む会の参加人数を抜く事ができるかどうか楽しみですね。

真夏の勉強は頭によく効くといえます。あなたも備探の最強軍団の仲間に入りませんか。

▲実施要項▼

- 日程 八月一九日(土)
- 時間 午後七時から
- 場所 中央公民館2F会議室
- 座長 出内博都城郭部会部会長
- 費用 資料代一〇〇円

日本の真実の歴史を学びたい

「記」及び「紀」によるもの

佐藤 壽夫

今まで、日本の古代史、上代史は故意に造った、『古事記』や『日本書紀』の二つの人造亡霊に崇られたというか、ふり廻されてきた。特に戦時中の皇国史の考え方は、あまりにひどかった。

そんなところから真実の歴史が学べるはずがない。現在、日本の各地で多くの古墳や遺跡が発掘され、この国の古代や上代の新しい事実が開明されつつある。

太安萬侶と二人で『古事記』を書いた稗田阿礼は「語りべ」で、それまでの歴史は、口から口に語り継がれたみだいな錯覚をしている人や、学者の人たちがかなりあると思う。

そんなことはありえない。
西暦二百年頃、日向や出雲にも漢字が伝わっていたことは「魏志倭人伝」を読んでも明らかである。しかし、その時代に書いたものは、いまは見つかっていない。

この国の大切な資料が西暦六四五
年六月十二日飛鳥板蓋宮で起きた、「乙己の変」(いわゆる大化の改新)で多く失われたからである。

既戸皇子(聖徳太子)と蝦夷の父、

馬子によって編まれた「天皇記」や「国記」が蘇我本宗家一族の滅亡とともに火中の灰と化した。たまたま焼かれようとした一部の「国記」を辛うじて取り出した船史恵尺はクイデーターの首謀者中大兄皇子に渡したと伝えられているが、これが敵方の首謀者の手に渡ることが『古事記』や『日本書紀』のうその始まりである。

文字の日本伝来は『記紀』によれば、応神天皇十六年(西暦何年ですか)百濟から王仁(「記」では和邇吉師)が『論語』十卷、「千字文」一卷を持ってきてからという。戦前の皇紀の数え方によれば、それは西暦二八五年にあたる。今では邪馬台国女王卑弥呼の使者が魏に至った年(二三九年)の四十六年後と数えるほうがわかりやすいだろう。

『論語』は紀元前四〇〇年に成立していたからよいが、私たちがいま「千字文」と呼んでいるのは、梁の周興嗣(四七〇〜五二一)の作とされている。作者の生まれる二百年ほど前にその著作が献上されたというのは奇妙なことである。王仁博士が「千字文」一巻、『論語』十巻をもってきたことは有名である。それは西暦四〇〇年後半のことであろう。

仏教が渡ってきたのは、それから

のち西暦五三八年ころである。

聖徳太子が摂政になられたのは、五九三年、憲法十七条が制定されたのは六〇四年である。この頃、文章に書いたものが全国にいくらでもあった。そのなかには歴史や系図などもはつきりしたものが沢山あったのである。現に西暦三〇五年頃在位された七代孝靈天皇と細姫との間に生まれた、第四皇子の彦峽島王、その子の小千御子以来、現在に至るまで連綿と記された小千家(越知、越智とも文字を変えている)の分家、井門家の系図が現存している。

それなのに、『古事記』ができたのは、なんと、七一二年で、ずっと後の時代のことである。王仁博士が来てからでも三百年以上もたっている。歴史を口から口に語り継ぐ必要などは常識的にいってありえない。よくも千二百年も『古事記』や『日本書紀』にだまされ続けていたものだと思う。

私は現在六十三才、この国の古代史、上代史に興味を持ち学びだして十五年、いま備陽史探訪の会に入会させていただき、「徹底的に『古事記』を読む会」に五回以降毎回参加させてもらっています。

講師の先生に自分なりに質疑を、

お願いしていますが、誤った「古事記」の解釈でなく(今までの校注でなく)いろいろな文献や、古墳、遺跡等の発掘資料、また、『古事記』以前の人名、地名、神社などを掘り下げて習いたい。

私にとってこれからさきの余生を、いままで習ったウソの歴史でなく、より真実の歴史を「『古事記』を読む会」を通じて学び、教えていただきたいものです。

また、会員の先輩諸氏の研究学問を教えていただければ幸甚です。

HOT HOT NEWS II

厚生年金さわやか講座

田口会長が厚生年金サンピア福山からの依頼で、左記の通り「郷土の歴史」について講演することになりました。応援に出かけましょうネ。

▲実施要項▼

- 日程 九月二五日(月)
- 時間 午後一時三〇分
- 場所 サンピア福山 久松の間
- 〒〇八四九一―二―三三三三
- 演題 「郷土の歴史」
- 講師 田口義之会長
- 費用 無料

☆何でも質問箱Q&A☆

Q伊勢神宮の内宮と外宮との間の街道に石の燈籠(石の角柱の上に燈火スペースが乗る)が数多くならんでいる。その角柱に菊の紋章とその裏に六芒の星?(イスラエル国旗のマーク)がついているが、そのわけは如何に?(質問者 門田幸男さん)

Aまず「素直に」お答えします。

この石灯籠は伊勢神宮が建立したものではありません、民間から寄贈されたものです。寄贈者は二荒伯爵と森岡善照氏(当時の神宮奉議会会長)で、製作者は木藤石材工業です。菊の紋章をつけたのは、それが神宮の神紋だからで、灯籠等の建築物にその神社の神紋をつけるのはごく自然です。

次に「六芒星」が着いていることについてですが、これは内宮・外宮の神紋ではありません。にもかかわらず石灯籠に着けたのは、別宮である伊雑宮の神紋だからつけよう、と、寄贈者が強く主張したからだとされています。しかし、二人がこれに拘った理由はよく分かっていません。今回残念ながら、原稿の締切りまでに、本当に伊雑宮の神紋であるかどうかの確認はとれませんでした。

回答者としては、なかば神紋化しているのかも知れませんが、むしろ魔除けの呪いと考えた方がよいのではないかと思います。実際、魔除けの六芒星は、この神社だけでなく、他にもよく見られるのです。

以上がご質問を「素直に」読んだ場合の回答です。しかし、門田さんのご質問の底意は、深読みかも知れませんが、「菊花紋はユダヤ王家の紋章で、六芒星はタビデの紋章だ。これがついているのは天皇家・伊勢神宮とユダヤ、あるいは日本民族とユダヤが深い関係があるのではないか」ということだと思えます。

読者の皆さんはあまりご存じないと思いますが、こうした「日ユ同祖論」は戦前からあって、今でもいわゆる「超古代史」論者などによって受け継がれています。そして、その根拠の一つとしてよくあげられるのが、この「六芒星の一致」なのです。他の理由も色々あるのですが、詳述する紙幅がありません。ここでは紋章の問題に絞って考えてみます。

実は、神宮には長い間決まった神紋がありませんでした。明治になってから初めて、皇室の紋章「十六葉菊花紋(十六弁菊花紋)」を神紋としたのです。もちろん皇祖神天照大神を祀っているからです。因みに、

以前から十六葉菊を用いていた神社は神宮以外にも数多くあって、菊の御紋がついていること自体、別段珍しくも何ともないのです。

そのうえ、この十六葉菊が皇室固有の紋章として使用され、かつ、それと認識されるようになったのはそれほど古いことではありません。遙か古代からと、一般に信じられているのはまったくの誤まりで、後鳥羽天皇(鎌倉時代初期)が刀剣に御印として使ったのが嚆矢とされます。

後に、後醍醐天皇が南北朝の動乱の際、この紋章をつけた下賜品を乱発したために広く流布するようになりました。皇族と一部の神社以外の使用が禁じられたのはずっと時代が下がってからで、明治四年(一八七二)の太政官布告によつてです。

では、古代の皇室の権威の象徴としての紋章は何だったのでしようか。明らかに帝の紋章と思われるものの文献の初見は文武天皇の御代で、『続日本紀』大宝元年(七〇一)の条に次のような記事があります。

「春正月一日、天皇は大極殿に出御して官人の朝賀を受けられた。その儀式の様子は、大極殿の正面に鳥形の幡を立て、左には日像・青竜・朱雀を飾った幡、右側には月像・玄武・白虎の幡を立て、蕃夷の国の使者

が左右に分れて並んだ。こうして文物の儀礼がここに整備された」(講談社学術文庫版 宇治谷孟訳)

ここでは日月や四神獣よりも「鳥」が重要な役割を演じており、これが天皇の紋章だったと考えられます。そしておそらくこの鳥は、三本足の「那智鳥」でしょう。しかしその後、何故か鳥や四神獣は使用されなくなりました。七つの意匠(デザイン)の中で、天皇の紋章として今日も残っているのは、即位大礼の錦旗に浮かぶ「日紋」と「月紋」だけです。

これより古く『日本書紀』推古天皇十一年(六〇三)十一月の条には「皇太子は天皇に申し上げて、仏の祀りのための大幡・観を作り、旗幟を描いた」(同 宇治谷孟訳)とあり、旗幟に描かれた紋章らしきものが推測できますが、仏教の儀式ですから違いかも知れません。

他方、由緒ある神社はほとんど神紋をもっています。最も一般的なものは三巴で、大和国一宮大神神社を始めとして、数多くの神社の神紋となっています(大神神社は菊花紋も併用)。賀茂神社は葵、春日大社は藤丸、熱田神宮は桐竹、太宰府天満宮は梅鉢、熊野三山は先的那智鳥で、皇室との深い関わりを想起させます。さて、「六芒星」は一般には「籠

「目紋」と呼ばれています。「カゴメケチャップ」の社章としても有名で、日本では昔から馴染み深いものです。よく似たものに「五芒星」があります。子供たちのよく描く「一筆書きのお星様」です。こちらは平安時代の陰陽師の大家、安倍(晴明)家の家紋であるところから「安倍晴明判紋」と呼ばれています。

文献によると、日本の家紋の始まりは平安時代に遡ります。当時、貴族たちのクルマは牛車で、これです。裏へ通勤したので、都大路は数百台の牛車で大混雑し、「牛車争い」がよく起きたといわれています。内裏に着き、所定の場所に駐めてからも、貴族たちが執務を終えて戻るとき、似たものが多く、すぐに見分けがつかないような洒落た印を着けたのが始まりとされます(新井白石の説で定説)。

ほかにこの印は、調度品や衣服にも着けていましたが、当初はあくまで個人のものでした。「家紋」となるのはこの印を子孫が永続的に受け継ぐようになってからです。すなわち平安時代末期のことで、神社の神紋の成立もほぼ同時期と考えると差し支えありません。つまり、天皇家や日本民族の成立に関わるような時期ではないのです。

次に、その意匠をどこから採ったかが問題です。

結論からいうと、初めは中国・朝鮮から渡来した品々(とくに衣服や織物)についていた印をそのまま借用したり、少々アレンジして使っていたようです。もちろん、後には日本独自の発展を遂げ、意匠的にも優れたものになっていきます。ただ、皮肉なことに、中国・朝鮮では家紋は成立しませんでした。

では、こうした意匠の本家が中国かというところ、そうではありません。ルーツはヨーロッパとオリエントです。つまり、西洋のエンブレムがシルクロードを通り中国・朝鮮を経て、間接的に日本に入ってきたのです。

問題の菊花紋や籠目紋も西洋から伝わった意匠の一つに過ぎません。こうした流れは建築史上の「忍冬唐草文」と似ています。ですから、意匠自体はかなり早くから伝来していたと思われれます。そして先に述べたように、牛車に独自の印(紋)を着けるのが貴族たちの間で大流行し、一二世紀に定着して家紋・神紋が成立したというわけですね。

そろそろまとめましょう。本家の西洋では、五芒星をペンタグラムといい、とくに魔除けとして使っていました。六芒星もそうです。

とにかく、両方とも宗教的・呪術的な色彩の濃い印なのです。

日本でも、例えば柳亭種彦の「用捨箱」に「昔より籠目は鬼のおそろるといひしならはせなり」とある通り、魔除けの呪いとして庶民の間でもよく知られていました。こうした風習が意匠の伝来と同時期に入ってきたのはまず間違いありません。

そして早くからその知識を得ていた安倍(晴明)家は、家紋として採用し、魔除けとして使っていた神社には、そのまま神紋にしたところがあつた——夢はないかも知れませんが、こう考えるのが最も自然です。

もちろん、古代において異文化の伝播には人の移動はつきものです。紋章の伝来においても、単なるモノや情報としてだけでなく、ユダヤ人自身がやってきた可能性はわずかながらあります。しかしその場合でも、あくまでも点としての渡来であつて、日本人(日本民族)に形質変化を及ぼすようなレベルではないでしょう。

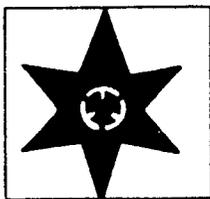
もちろん、文武天皇、後鳥羽天皇の事例をみてもわかるように、天皇家との直接の関係も考えられません。以下は余談です。

武家の家紋のルーツの一つは、関東の児玉党の「軍配団扇紋」です。「源平盛衰記」には「児玉党団扇の

旗指して」云々とあります。もう一つのルーツは源氏の白旗、平氏の赤旗です。初めは色分けしただけの極めて単純なものでした。それが武士団の成長にともない、多様化・複雑化していきます。そして戦乱が繰り返され、武士が大活躍する世の中になると、自らの戦いぶりをアピールするために旗差し物に目印をつける必要が出てきたのです。こうして鎌倉時代中期には、今に伝わる主だった家紋がほとんど出揃います。

最後に。左図は水戸市の市章です。六芒星に非常に似ていますが、星に似た部分は、漢字の「水」を図案化したものです。先入観があると間違ってしまういい例です。

「★紋」があります。だれもが「星」だと思ってしまう。ところがこれは、桔梗の花をデフォルメしたものだといふ説もあるのです。歴史を見る場合にも、一つの見方に囚われることなく複眼的に見ていきたいものです。



水戸市の市章。水戸の字を星形に、中央3つのトでミト。

(回答者 歴史民俗研究部会)

ささやかなプレゼントを

あなたに

木之庄・本庄町の史跡巡り

木之庄町・本庄町は城下町福山に隣接し、城下八ヶ郷として、特別な支配を受けていた中心的な地域でした。しかし、現在は都市化の波が押し寄せ、この目でみ、手で確かめられる史跡はそれほど多くありません。とはいえ両地区の歴史は滔々として古く、縄文期の遺跡さえ残ります。

歴史時代に入っても、王朝国家時代には勅使田として登場し、中世には吉津荘として文献にもその名が現れます。また、近世になってからは、鞆および深津の二拠点に挟まれた地理的条件がとくに重要視され、福山の基盤のひとつになったものと思われま

さあ、現在の景観・風景をどこかに片づけて下さい。微かな歴史のかけらをあなたの心に投げこんで下さい。そして目を閉じてイメージの翼を広げて下さい。

わたしたちのほんのささやかなタイムトラベルがこの秋始まります。

▲主な探訪予定地▼

・**稲光寺** 吉津荘平居士と寂室元光ゆかりの寺、幻の木之庄焼き。

- ・福山城の遺構 驚愕の真実/木之庄の現存住居に城の遺構が残る。
- ・法成山正成寺と九文田 地名に残る吉津荘(木之庄)の残像。
- ・木之庄貝塚 二〇〇〇年のタイムトンネルを抜けたそこには…
- ・木之庄八幡神社 宮座・神楽・流鏝馬・湯立神事等の伝統を伝える。
- ・木之庄発電所跡 近代福山誕生の原動力。

- ・中世新涯跡 「土手外」の地名に秘められた中世土手の現在とは…
- ・飛地山城跡・九日ヶ峠城跡・本庄富士 本庄に山城がノ展望は遙か。
- ・小坂山墓所 動乱の幕末、若くして斃れた阿部正方、独り眠る。
- ・四ツ堂と墓田碑 本庄開発の縮図。
- ・円照寺 渡辺氏の改宗政策に抗して苦難に耐え、信仰を守る。

▲実施要項▼

日時 九月一七日(日)

(注) 前回案内の一六日は誤りでした。お詫びして訂正致します。

時間 午前九時集合(小雨決行)

場所 広島県立博物館前芝生広場

参加費 五〇〇円(資料代等)

参加受付 八月十四日開始。事務局

にお申し込み下さい。

☆弁当・飲物持参。山歩きのできる
かっこうで参加のこと。

新入会員紹介

前回以後、次の方々が新しく入会されましたので紹介します。

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会
個人情報が含まれるため掲載できません。

備不思議旅「講師種本実、平田恵彦両氏。参加六五名。バスに乗り切れなかった会員は、自家用車四台に分乗して出発。

六月一七日(土)「備後古城記」を読む。参加一八名。最後に木之上城古代茨城説の可能性について検討。終了後、会報65号発送作業。

六月二四日(土) 第六回郷土史講座「福山の古建築」講師は川崎雅博さん。参加四九名。郷土史講座の最多参加人数記録を達成。川崎さんの講演、資料とも充実。

七月一日(土) 第三回古墳講座Ⅰ。

「古墳の形について」前方後円墳の墳形のルーツについて学ぶ。

参加一二名。

七月八日(土)「古事記」を読む。

「神々の生成」の章を学ぶ。参加二八名。夜、役員会。一二名参加。

七月一五日(土)「備後古城記」を読む。参加二三名。終了後、例会

資料と郷土史講座資料作成作業。

七月一六日(日)バス例会「ある晴れた日の勝山は森の中にたたくずむ」

参加五四名。講師神谷、平田両氏。ひたすら暑い一日だった。

七月二二日(土) 第七回郷土史講座

「戦国武将入江氏について」講師の杉原道彦城郭副部会長が熱弁ふるう。参加二八名。

事務局日誌

六月三日(土) 第二回古墳講座Ⅰ。

「古墳をまもる施設」参加一〇名。

六月四日(日) 七月例会下見。講師

は神谷、平田両氏。毎来寺の板面

がすばらしい。

六月一〇日(土)「古事記」を読む。

「神生み」「火神被殺」を中心に

学習する。参加二九名。終了後、

六月例会資料の作成作業。

六月一一日(日)バス例会「古代吉

計報

立石定夫氏(たていし・さたお)

(元福山市長、元県議、福山ワシントンホテル会長)

六月七日午前四時三〇分、福山市の寺岡整形外科病院で心不全のため逝去、六七歳。

一〇日午後一時から、福山市寺町の大本寺で密葬。二六日午後一時より福山市体育館で本葬が行われた。立石さんは同志社大学大学院中退後、昭和三〇年から弁護士を開業、同三八年から県議二期を務め、この間、福山地区弁護士会会長や県議総務委員長などを歴任された。

昭和四五年五月、福山市長選に初当選。三期半ばの五四年七月に衆議院選出馬のため市長を辞任されるまでの間、備後地区の中核都市づくりを目指して芦田・駅家・加茂の各町との合併に尽力。また、市民図書館、市民病院、芦田川河口堰の建設等にも奮戦された。昭和六〇年四月、福山ワシントンホテルの会長に就任。備陽史探訪の会にとつては顧問的な存在だった。数々の例会や郷土史講座の講師を何度も努めて下さり、まさに大恩人であった。心からご冥福をお祈りしたい。

計報

猪原一身氏(いのはら・かずみ)

七月二九日午後六時二五分、福山市民病院で肝不全のため逝去、六五歳。

三一日午後一時より福山市西深津町の晩會館で葬儀が行われた。

囲碁が強く、五段。いつも奥様とお二人でバス例会に参加されていた。その際にも囲碁の本は手放さず、講師の説明の合間をみて勉強されていたのが強く印象に残っている。

蝉しぐれ 木下閣に立ちつくす
逝く友や 蝉泣きわれは石握る
合掌。

一泊旅行

キャンセル待ち募集

一 秋天に戦国の残光を求めて
秋の一泊旅行は、七月初め募集定員の四五名に達しましたが、六〇名までキャンセル待ちを募集します。

昨年約六〇名の応募がありましたが、キャンセルが多く、最終的には四五名の参加だったからです。

▲主な探訪予定地▼

- ① 姉川古戦場
- ② 小谷城址(国史跡)
- ③ 多賀神社
- ④ 国宝 彦根城とその周辺

- ⑤ 越前朝倉氏一乗谷遺跡
- ⑥ 清滝寺徳源院

☆余裕があれば、蓮華寺、気比大社などにも立ち寄ります。

☆宿泊は琵琶湖畔の彦根簡易保険保養センター、設備は抜群!

▲実施要項▼

日程 一〇月一四、一五日(土日) 雨天決行。

集合時刻 午前六時四五分(厳守)

福山発 七時二〇分新幹線乗車。

集合場所 福山駅南口「釣人の像」

参加費用 会員 四五〇〇円 一般 四六〇〇円

☆なお、JR「ジパングクラブ」に入会されている方は右記料金から三〇〇〇円程度安くなります。

募集人数 四五名限定

(キャンセル待ち一五名募集)

注意 小谷城に登るので必ず山歩き

の出来る格好で参加の事。

受付開始日 現在受付中

☆ハガキまたは電話でお申し込み下さい。詳しい要項をお送りします。

☆初日雨天の場合は、危険防止のため小谷城には登りません。二日目雨天の場合は、一乗谷遺跡の見学時間が短縮されます。代わりに安土城考古博物館、銅鐸博物館、福井県立博物館、気比の松原などをめぐります。

会報67号原稿募集

会報67号の原稿を募集します。

内容は小論、エッセイ、短歌、俳句、川柳等、何でも結構です。

タイトルと氏名は別で、本文タテ一六字×一二〇行以内。字数を守って下さい。多すぎると載せられない場合があります。送り先は事務局。

締切りは九月一六日(土)。次回発行日は一〇月七日の予定です。

『山城志』原稿募集

『山城志』13集の原稿を募集します。四〇〇字詰原稿用紙で最大五〇枚まで。ワープロ原稿はタテ三二文字×二二行で三〇枚まで。

内容は、原則として、歴史に取材したオリジナルな論文、エッセイ、小説とします。最終締切りはいよいよ今月一杯。今回遅れた原稿は受け付けませんのでご了承下さい。

備陽史探訪の会事務局

福山市多治米町五一一九一八

☎〇八四九一五三一六一五七

(磐座亭主人)